



# ほらふきコロラテの冒険

森

桂

角川書店

## ほらふきココラテの冒険 森村 桂

---

発行者／角川源義 印刷所／旭印刷 製本所／宮田製本  
発行所／角川書店

東京都千代田区富士見 2-13

〒102 振替 195208

TEL 東京265-7111 (大代表)

昭和49年 2月20日 初版発行



---

Printed in Japan

落丁・乱丁はお取替えいたします

0093-872124-0946(0)

# 目次

- 一 目立たない男に突如やって来た出世と縁談……………七
- 二 親の仇は新建材……………四
- 三 百万人に一人の舌を持つコックの唯一の弱点……………七
- 四 選ばれた三人の勇士たち……………四
- 五 泥棒は王様のはじまり……………三
- 六 どうせやるなら銀行強盗……………二

七 夢の島で夢の島への船造り……………一〇

八 食料ならばそろっております……………一五

九 引きとめてくれる人さえいれば、  
夢はいつでも捨てましょう……………一五

十 クイーン・コロシア号ただいまSOS……………二七

十一 ああ、あの声は母の声……………三六

あとがき……………二七



# ほらふきココラテの冒険



## 一 目立たない男に突如やって来た出世と縁談

もしも彼らが、コアラテに出逢わなかったら、彼ら三人の運命も、もう少しまでもであったかも知れない。たとえ全てに運が悪かったとしても、曲りなりにも何とか人の後から、のたのたつて行くことは出来ただろう。そうなのだ。多くの人たちが、そうして虚しく一生を終える。

しかし、彼らは希<sup>ねが</sup>った。もう少し人間らしい生き方はないだろうか。自分の道は、これだけだろうか。もっと大きな可能性はないだろうか。たった一度しかない人生じゃないか。いや、実をいうとその時、彼らは、もはやどうしようもなかったのである。

彼らにとって、その時、コアラテの言葉は、唯一の光明であった。彼らは、決してコアラテの言葉なんか信じちゃいなかったかも知れない。ただ、彼らは、その時、信ずる他なかった。彼らが、もう一度人生をやり直すためには。しかし、そう思ってしまったことこそ、彼らの不運が、また、あるいは、もしかしたら、大きな幸運があったのかも知れない。そう、それは、まだ三人のうち、誰も知ら

ない。生きている人全てが、自分の明日を知らないように。いや、それは、何と素晴らしいことだろう。明日を知らない、だからこそ、ココラテは生きているのだ。

三人の男たちのうち、まっ先にココラテの目にとまったのは、銀行員の鈴木信一である。何で、彼が最初に目にとまったのか、正直言って信じられないのだが。というのは、彼は、他の人を押しつけて人の目にとまるなどということのありえない、ごく目立たない男だからだ。どのくらい彼が目立たないかというと、いつだったか大学時代、悪友達が賭をしたことがある。帝国ホテルでフアッシュン・ショーがあった時、その舞台の真中を彼が横切ったら、どうだろう、という賭だ。何も知らない彼は、アルバイトだよと言われて、五百円もらって、舞台の上手から下手に、横切った。しかし、何の騒動も起らなかった。次から次にあでやかに着飾って登場するモデル達を見つめている観客は、その脇を面白くもなさそうに無表情で、小学校で習った歩き方をそのまんま、あやつり人形のごとく、右と左を交互に動かして、内またで歩くいつも通りの姿の彼が横切ったのを、誰も気がつかなかったのである。

そのくらい目立たなかった男が、どうしてまっ先きにココラテの目にとまったのか、それだけは不思議なのだが、それにしても何とも冴えない。この古い、安物の昆布のようなおやじさんにもらった背広。洗いざらして縁がすり切れ、ところどころほつれた、おしめを縫返したと誰もが信じているワイシャツ。大学時代からのままの、今にも崩壊しそうな靴。強度の近眼のための丸い黒ぶち眼鏡。一体、これでよく、はえある銀行員が勤まると思うのだが、会社というものは、試験で人間を入れるか

らだ。

地方とはいえ、一応国立大学を出た彼は、試験はまあ中くらいであったし、信州の山の中で、旅館の仕立物をしている七十を越した未亡人のおふくろさんは、十一人も子供がいて、彼は末っ子だが、ただ一人の男だから、彼だけには、何とか大学まで出そうとみんなで力を合せてくれたことを思えば、彼が大正時代のおやじさんの服を、大事に着続けていることは、大変な親孝行のように、誰もが思っ  
てしまっても無理はない。しかし、月給をもらうようになって、ボーナスももらい、それが、三十になる今になってもまだ、同じ姿であるとなると、全く話は別なのだ。会社の連中は、彼を大正スズメと言つてバカにするし、

「君、その服装なんかならんかね。そんな恰好で、客の前に立つてくれちゃ困るよ。今度のボーナスで新しい背広と靴を買わんのだったら、考えさせてもらうよ」

昔、非常に貧乏だった、同じ信州生れの支店長は、それ故に、唯一の彼の理解者であつたのだが、この事で、何度彼を呼びつけたか知れない。

「ハッ、かしこまりました。来週の月曜からは、必ず新しい背広を着てまいります」

そして、彼は、その通り、日曜日にはデパートに行き、背広から靴まで一式、整えて来るのだが、いざ月曜、それをつけてさっそうと四疊半のアパートを出ようとして、ふっと急に心細くなって、また古いのを着てしまう。そして、彼はひとり、

「フーッ」

と息をつく。やっばり、これじゃなきゃ駄目だ。彼は、テレテレになってどっちが表だか裏だか解

らない、女性がネクタイを選ぶ時は、その男性の総人格で選ぶから地味になり、男は、ポイントとして選ぶから、派手になるというけれど、まさに、総人格といえる、葬式にしかつけていけないネクタイをそれでも鏡をハッシと睨んで、キュキュッと締めて、すぐまた、グズグズになるのを、もう一度、彼しかとめられないとめ方で締めて、また支店長のすさまじい雷が落ちるのも忘れて、アパートを出てしまう。

食費や衣類のない戦後の苦しい時代に、十一人姉弟で貧乏の限りを尽したせいか、それとも、彼が生れた時にはすでに死んでいた、役場に勤めていた父親、唯一の我が家の同じ男性であるおやじさんの肌をなつかしもうとしているのか、それとも、消費文明に対する彼の無言の抵抗なのか、誰も真実を知らないし、彼自身、考えていないかも知れない。いずれにせよ、彼は、まるでそれが自分の肌のごとく、とり変えようとはしないのだ。猫やライオンだって、一生同じ毛皮を着てゐるではないか。

といって、彼は上役に反抗し、出世のさまたげになるのを恐れていないというわけではない。彼は人に反抗するなどという勇猛心は、蛙に臍がないのと同じくらい確実に持ち合せていないし、人並みに出世したくてたまらないのだ。ただ、この服だけは、何故か彼の肌から離れると落着かないだけであり、そして、出世しないのは、彼は、何をやっても、人並みよりちょっとのろく、慎重さをきわめるあまり、同じところばかり繰り返し調べるからなお遅いという、要するに、あまり優秀とはいえないからにすぎないのだ。彼にとって、銀行員としての唯一の取柄は、真面目すぎるほど真面目なこと、そして、会社あるいは社会にとって、どういうものか一番大切な「大過なく」ということが、彼の場合、まさにそうであるということだ。大過などというのは、たいてい、何かでつかいことをやろうと

した男のやることであつて、そんな恐れおおいことは、彼に出来るはずがないのである。

その彼に、しかし、その大過ないということ、真面目すぎるくらい真面目だということだけのために、生れてはじめて、天地がひっくり返つて、うなぎ井になるくらい、信じられないような運がまわつて来た。ある日、彼は支店長に呼び出されて言われたのだ。

「君、今度の人事移動では課長代理になることが決つたから、そう心得てくれたまえ」

「この私が、課長代理にでありますか」

鈴木信一は、信じられないで言つた。この、朝は誰よりも早く出勤し、仕事中は無駄口一つたたかず、私用電話もかけたことはおろか、仕事で友達が出て来て会つたりもしたことのない、（とはいへ、かける友達もいなければ、ましてや訪ねてくれる人もいないけれど）真面目ひとすじ仕事してるにもかかわらず、就職してすぐにやらされた外交では、ロベタの故か、調子よくないせいか、それとも正直すぎるのか、どうも客がついてくれず、客あしらいは悪く、今は、事務をしているが、どうもいくらがんばっても仕事が遅く、みんなにバカにされ、着たきりスズメの、それも大正時代の背広だから、大正スズメなどと渾名されている。およそ出世とは見はなされ、うっかりすると、生涯、平で終るのではないかと半ばあきらめていた自分が、同年の人達のまだ少ししかかっていない課長代理になれるという。狐だかかわ獺とにつままれた思いなのだ。

「いや、君は実に真面目で、よくやつてくれる。わしも同郷のよしみで、何かと引立てて来たつもりだが、鼻が高いよ」

「あ、ありがとうございます」

鈴木信一は、九十度の最敬礼をして言った。そうか、そうだったのか。自分の服装のことはよく言うけれど、しかし、何かと言うと、この支店長だけは目をかけてくれたのだ。自分という人間の良さを、さすが上に立つ人はちゃんと見ていてくれたのだ。

「ありがとうございます。私こと鈴木信一、生涯この御恩は忘れません」

日頃無口で地味なたちであるにもかかわらず、そして、めったに感動したりしないにもかかわらず、（といって、別に彼は、重厚なる性格というわけではなく、ただ、感動するチャンスなどというものが、彼にはめったに訪れないにすぎないのだが）ひとたび、彼は、非常に感動すると目は逆さになって三角になり、きつと、宙の一点をみつめ、新劇役者の如くやたらオーバーな演説口調で、内心思っていることを、洗いざらい喋ってしまう癖があった。

「お恥ずかしい話ですが、わたくしの個人的責任とは全く関係ありませんにもかかわらず、私はこの通り、痩せの小男でございますし、容貌も、目は細くて、声もかすれているものですから、何の取柄もありません。唯一の救いは、いい成績をとり、東大に行くことでございました。私の少年時代、いえ、青春というものは、全部、ただ受験受験で追いまくられました。私は、夜三時間と言われれば、三時間しか眠りませんでした。塾に通い、徹夜して勉強しました。せつせと旅館の浴衣や、女中の着る着物を縫って働いております郷里の母親からは、半分アルバイトせいわれましたが、私は、くみとり便所の隣の二畳の、臭いから安く借りられた部屋を借りて、がんばりました。麦飯にソースかけて、そればかり食べておりましたら、鳥目になったこともあります。母は、もういいかげんで、どの大学でも入ってくれ、夜間でもいい、大学でさえありゃ、どこも同じなんだと言って来ましたが、私

はがんばりました。そして、三年浪人した末、ついに、国立大学に入りましたんです。そして、おかげでこの銀行にも入れました。私は、ここでも人一倍働いたつもりでございます。みんなより必ず三十分早く来て、残業は誰よりも遅くまでやりました。ところが、みんな私をバカにいたします。大正スズメ大正スズメと私の同僚が言うのを聞いていれば、新入社員は、つい信じます。私は、どんなに今まで口惜しゅうございましたか……。しかし、しかし、ついに私は、同僚を押しつけて、課長代理になれるんです。郷里の母がどんなに喜びますか、私こと鈴木信一……」

鈴木信一は、涙ぐんでいた。

「いや、いや、おめでとう、おめでとう」

支店長は半ば満足そうに、半ばもてあましげみに彼の感動するさまを見ていたが、身をそらせて、  
「いや、わしも喜んでゐる。実は、それについて、もう一つ、君に大事な話がある」

支店長の目が光った。

「君、結婚する気はないかね」

「ハッ？」

鈴木信一は、急に返事が出来なかった。結婚、自分はもう三十である。したくてたまらないのだ。しかし、東京には自分に縁談を世話してくれる人はおらず、たまに郷里に帰って、親戚の人が持ってきてくれる話は、出っ歯で年上の人だったり、やけに太った首のうずまった人だったり、いい縁談というものがないのである。

「実は、榊原さんを知ってるだろう、東洋保険の社長の」

東洋保険といえど大保険会社で、この銀行の大事な取引先だ。

「はあ……」

一体、そんな偉い人とどういう関係があるのだろう。

「その姪ごさん、といつても早くに両親を亡くされて、榊原家で実の子同様に可愛いがられてるお嬢さんがいるんだ。榊原家にはお嬢さんがいないから、それはそれは大事にされているんだ。この写真の方だよ」

鈴木信一は、おそろおそろ写真を見た。一重瞼のはっきりした、頬のふくらした、明るくて派手な顔立ちの、いかにも品のいい人が晴れやかにほほえんでいた。何てきれいな人だ、鈴木信一の心臓の音が、支店長に聞きとられるのではないかと思うような音をたてた。一体、このお嬢さんがどうしたというのだ。自分の同僚の誰かと縁談があつて、何か聞きだそうと自分をよんだのだろうか。そうだ、きっとそうにちがいない。鈴木信一は、そう自分に思いこませ冷静になろうと努めた。

「どうだ、いいお嬢さんだろう」

「は、はい、お美しいお方でいらっしやいます」

鈴木信一は、うっかりしたことをいって、パーカ、それは君とは、まったく関係ないよ、などと笑われると困るから、やっとそれだけをいった。細い目はパチパチし、鼻の頭からは汗がふき出していた。

「いや、氣に入ってくれば、けっこう。これで、話はとんとん拍子にいくだろう。君、今度の土曜日、ホテル・オーロラで見合だ。いいね、頼むよ」

「支店長、あの、どなたとどなたが、見合なさいますんで」